

## 旧約聖書を読んで感じる事 (114) エズラ記 ①帰還と神殿再建

キュロス大王のバビロン制覇による歴史的イベントによって、ユダヤ人はパレスチナへの帰還が叶いました。70年もの長い期間、捕囚の民とされていれば、世代が代わり、過去を実際には知らない人々がいます。すっかり当地の生活に溶け込み、生活の基盤を得ていた人もいるでしょう。このために、この時期こそ、自らの信仰、歴史、伝統、伝説を記録に留めなければならなかったでしょう。夢物語に聞かされていた故国への帰還の様子を具体的に記録した書記官エズラがいました。彼も故国の再興を願い、神殿の再建を熱望していました、書記官の記録だけあって、正確を期す姿勢が読み取れます。エズラはまず、法的根拠を記し、具体的な数字も挙げています。



1. ペルシャ王・キュロスの第一年の布告 (BC 539・バビロン)
2. 布告 (神がキュロスにエルサレムに神殿建築を命じた・主の民に属する者は誰でもエルサレムに上って良い・すべての者が神殿への随意の捧げものをして良い・ネブカデネツアルによって奪われた祭具類を返還)
3. 帰還した氏族、職名の報告 合計 42,360人、その他男女の使用人等 合計 7,500人、動物(馬、ラバ、ラクダ、ロバ)、神殿再建工事の献金(金 61,000 ドラクメ (10 億円以上))

ユダの首長であったシェシュバツアルを指導者としてバビロンから出発しました。出エジプトの苦難、民の頑なさを思い出させられます。

到着後は祭司を始め、数名の指導者が立ち上がり、まず祭壇を築き、礼拝を捧げて、一致団結しました。第七の月になって、イスラエルの人々は自分たちの町にいたが、民はエルサレムに集まって一人の人のようになった。祭司たち、すなわちヨツァダクの子イエシュアとその兄弟たちは、シェアルティエルの子ゼルバベルとその兄弟たちと共に立ち上がり、イスラエルの神の祭壇を築き、神の人モーセの律法に書き記されているとおり、焼き尽くす献げ物をその上にささげようとした。(エズ 3:1)

彼らは土地の住民への警戒をしながらも、モーセの律法に則り、信仰第一のスタートを切りました。同時に神殿建築のため、資材の購入も始めました。やがて神殿の基礎が据えられたとき、彼らの感極まった喜びの叫び声は非常に大きいものでした。土地の住民は脅威を感じ、神殿建築計画を妨害、挫折させようとした。彼らはペルシャの参議官を買収して、訴えを起こし、工事は中断してしまっただけです。クセルクセス王、アルタクセルクセス王の名前がでていますが、時代が下がっての王ですから、ユダヤ人への妨害が長引いたということを示唆したかたのしょうか。ユダヤ人からも負担への苦情、労役への不平不満も出たのではないかと想像します。預言者ハガイとイドの子ゼカリヤも懸命に再建を祈りました。

やがて、ダレイオス王からキュロス王が発布した覚書が届き、この命令をあえて犯し、エルサレムにあるこの神殿を破壊しようとする王や国があれば、そこを御自分の名の住まいとされた神が、一人残らず滅ぼされるように。わたしダレイオスが、この命令を下す。命令どおり実行せよ。(エズ 6:12) と返事がありました。こうして、神殿建設は再開され、紀元前 517~518 年、ダレイオス 1 世の統治 6 年



第二神殿模型 日本聖書協会

目の間に完成したとされています。帰還から 20 年目のこととなります。神殿は高さ 60 アンマ(27m)、間口 60 アンマ、となっていますので、ソロモンの神殿の高さ 30 アンマ、間口 20 アンマと比べれば、3 倍の広さになっています。また、工事期間は、ソロモンは 20 年を要しましたが、4 年くらいで再建が叶ったのです。捕囚の地から帰って来たイスラエルの人々も、イスラエルの神なる主を尋ね求めて、その地の諸民族の汚れを離れて来た人々も皆、過越のいけにえにあずかった。(エズ 6:21)と盛大に喜び祝っています。